

品質管理との出会い



前田建設工業(株)
小原 好一

私の品質管理との出会いは40年以上前に遡る。1972年に前田建設工業(株)に入社し、土木技術者として高瀬ダム(長野県)の施工現場に従事した。当時のダム事業を振り返ると、治水、利水など社会の発展に大きく貢献する一方で、規模の拡大に伴う被害も顕在化していた。その代表例が、1976年のティートンダム(米国)決壊事故である。総貯水量2億8800万 m^3 を誇るロックフィルダムのティートンダムは、施工前からダムサイトの透水性の高さを指摘されながらも工事が進められ、1975年3月から湛水開始、1976年6月3日に漏水が確認されてから翌々日の6月5日に決壊、死者11人、負傷者数千人、死亡家畜約1万3千頭、被災戸数約8千戸、被害総額約20億ドルの大惨事となった。これだけの災害でありながら死者が少なかったのは、近隣住民のネットワークが行き届いていたことが理由とされている。この事故の報を受けて、作業所の品質管理部門に所属していた私は、高瀬ダムの安全性の検証に昼夜を徹して携わるようになった。調査を進めるにつれて、決壊原因は建設前から指摘されていた基礎地盤の透水であり、亀裂の多い溶結凝灰岩でありながら、その止水対策が不十分であったことが明らかになった。この事故を契機として、ロックフィルダムにおける基礎地盤掘削以降の止水対策が強化されたことは言うまでもないが、私が痛切に感じたのは、自然への畏怖が薄れ、技術に対する過信が引き起こした事故であり、自然と人間の「適切な関係」を失った悲しき教訓として今でも脳裏に焼き付いている。そして、品質、安全、環境などの課題に対して謙虚に向き合い、ものづくりの質向上はもちろんのこと、仕事そのものの質を高めていく必然性を身をもって学ぶ貴重な経験となった。

続いて、「経営の質」「グローバルの品質管理」との出会いは、2005年に東京で開催された品質国際会議に端を発する。入社以来33年間従事したダム建設現場を離れて、2013年11月に本店総合企画部に配属された。その数か月後、品質国際会議の実行委員長を弊社の前田又兵衛名誉会長(当時)が務めていた経緯から私は実行委員として準備に携わることになったが、最も苦心したのは基調講演・特別講演の調整であった。実行委員会から託されたミッションは、トヨタ自動車(株)豊田章一郎名誉会長、Dr. A. V. Feigenbaum氏(米国)、東京理科大学狩野昭教授(当時)に続く講演者の招請であった。品質国際会議は、3年ごとに日本、米国、欧州の持ち回りで開催される。1996年以来9年ぶりの日本での開催に際して実行委員会の命題は、日本のみならずアジアの品質管理の進展を世界に発信することであった。私は本当に困ったが、日本経済団体連合会にご相談させて頂きながらアプローチを重ねた結果、サムスン電子のY. W. Lee副会長よりご講演のご快諾を頂いた。国際会議において討論を進めるにつれて、品質管理の普遍的価値とエリアにおける特色の双方を認識するとともに、日本的な品質管理である「職場第一線のづくり」などの素晴らしさを改めて実感することができた。

このたび日本品質管理学会の運営に携わる運びとなり、拙い経験ながらも産業界の立場で日本的品質管理とグローバル品質の双方の良さを活かして、大久保尚武前会長が打ち出したJSQC中長期計画「SHINKA」の実現に向けて椿広計会長を支えつつ、微力ながら全力を尽くしたい。